

第5回芝不器男俳句新人賞 最終選考会

日時：平成30年4月14日（土）

場所：荒川区立ゆいの森あらかわ ゆいの森ホール

選考委員会：選考委員 城戸 朱理氏（詩人）

齋藤 慎爾氏（俳人）

中村 和弘氏（俳人）

対馬 康子氏（俳人）

西村 我尼吾氏（俳人）

特別賞 関 悦史氏（俳人）

コーディネーター 筑紫 磐井氏（俳人）

アジェンダ：1. 実行委員長挨拶

2. 荒川区地域文化スポーツ部 文化交流推進課長 谷井千絵氏 挨拶

3. 各選考委員より各予選通過作品に対する批評・感想

4. 芝不器男俳句新人賞受賞者の選定審議

5. 各選考委員の奨励賞紹介（特別賞含む）

6. 閉会の挨拶 西村我尼吾氏

予選通過作品：34編（作品受付番号1番、2番、5番、13番、14番、20番、21番、22番、
23番、26番、28番、33番、34番、35番、38番、44番、45番、51番、
54番、56番、58番、59番、68番、78番、81番、84番、87番、95番、
100番、101番、105番、107番、114番、136番）

1. 実行委員長挨拶

実行委員長 川田 誠一氏（産業技術大学院大学学長）の挨拶は、『芝不器男俳句新人賞ホームページ』のお知らせコーナーに掲載されております。以下のURLからアクセスしてください。

川田実行委員長挨拶：http://fukiosho.org/_src/sc706/20180416.pdf

2. 荒川区 文化交流推進課長 谷井 千絵氏 挨拶

皆さま、こんにちは。荒川区にて俳句文化振興を担当しております谷井千絵と申します。第5回芝不器男俳句新人賞最終選考会の会場として「ゆいの森あらかわ」をご利用頂きまして誠にありがとうございます。若い俳人の皆様がこの「ゆいの森あらかわ」にお集まり頂いた事、大変嬉しく思います。

この「ゆいの森あらかわ」は開館して約1年の新しい施設でして、「人と人」「本と人」「地

域と人」「文化と人」というテーマのもと、中央図書館、吉村昭記念文学館、絵本館、子どもの広場など多くの要素を融合した施設となっております。また、現代俳句センターを設けて、現代俳句協会様よりお預かりした貴重な俳句資料も取り揃えておりますので本選考会後も是非とも「ゆいの森あらかわ」をお楽しみ頂ければと思います。

荒川区は平成27年3月に「俳句のまち宣言」をしました。荒川区は松尾芭蕉「奥の細道」矢立初めの地であります千住がありますし、また日暮里は正岡子規やその他の俳人が訪れ俳句を詠んだというゆかりの地であります。この地で芝不器男俳句新人賞の最終選考会を実施頂けることを非常に嬉しく、そして、有難く思います。各賞を受賞された若い俳人の皆さまが今後活躍していく際に、荒川区や「ゆいの森あらかわ」のことを思い出してくれば幸いに思います。

3. 各選考委員より各予選通過作品に対する批評・感想

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

この芝不器男俳句新人賞は、第5回ということで20年もの歴史ある賞であり、更に今回は140編という今まで最も多くの作品が集まりました。その中から予選通過した34編の作品に関して、各賞の選考を議論していくこととなります。よろしくお願い致します。

まず、34編の予選通過作品に関して各選考委員より批評・感想を頂きたいと思います。今回の選考会では、選考委員お一人ずつに批評・感想を頂く担当作品を割り振らせて頂いております。各選考委員によって批評の仕方が異なる部分もあるかと思いますが、時間の関係上、駆け足になるかと思いますがご了承下さい。それでは、各選考委員から担当作品に関する批評や感想を頂きたいと思います。よろしくお願い致します。

選考委員：城戸朱理氏（詩人）

私は俳人ではなく詩人ですので、同じ詩ではありますが門外漢ということになります。世界には約1500の言語がありますが、そのほとんどが「詩」という定型を持っています。日本において、その「詩」は和歌という形で発展していきますが、和歌は中世に至るまでに一つの決まった主題系を整えて形式が成立していきます。それに対して、和歌的でないものという意味で俳諧というものができました。もともと俳諧の「俳」という漢字は「変わったことをして人を楽しませる」という意味があり、その成り立ちを考えると俳句というのはどのように自由であっても良いと思います。とはいえ、俳諧から俳句に至るこれまでの長い歴史の中で有季や定型など、制限的なしほりがあるのも事実です。ただ、それを打ち破っていく力というのが、この芝不器男俳句新人賞で求められているものなのではないかと考え、選考委員をさせて頂いております。

私は第一回目から選考委員をさせて頂いていますが、今回は最も応募数が多く、且つ、内容としても極めて充実した作品が多かったと思います。それでは私の担当作品に関するコ

メントに移らせて頂きます。私の担当は、作品受付番号2番、20番、21番、23番、26番、56番、78番です。

<作品受付番号2番>

一読したところ、俳句的な制度からの逸脱がかなりみられます。同時に新しい詩というものを17音の中で発見していこうとする姿勢に感銘を受けました。例えば、次に示すような句です。

No.6 「玉葱が溢れて座る場所がない」

何を言っているのか一瞬わかりませんが、ユーモラスなイメージの強さがあります。

No.17 「反戦の思想を運ぶ蟻がいる」

政治的な運動や気運が高まっているような有様、どこか寓話的でいて現代との接点も感じられ、非常に印象に残りました。

No.29 「盂蘭盆会みんないるのかいないのか」

俳句としては少し破調ですが、「盂蘭盆会」以下、生者のもとへかえってくるにも関わらず誰がいるのかいないのかわからない、この生死のあいまいな境目のようなものが17音の中に立ち上がっています。これらの部分を評価して推薦しました。

<作品受付番号20番>

この作品は現代的な軽さ、ある種のポップさに裏打ちされた軽みを評価しました。

No.1 「さきいかの売り上げほどの冬が来る」

「さきいかの売り上げ」と「冬」というのが等価に測り合えるのかということ…。この感覚事態が既成の感覚ではない何か新しいものを一生懸命探そうとしている「感覚の新しさ」があります。大事なのは、この句で詠われている「感覚の新しさ」がいかに共有されるかという事だと思います。つまり、ひとつの新しさや驚きを五七五の中で提示したときに読み手に伝わるかどうか重要です。

No.11 「ねえきっとポイントセチアが血塗れよ」

非常にぞっとするところがありますね。

No.20 「夫の手の甲の静脈冬木立」

生と死の対立概念といいますか、対立する違う概念のものを一緒に並べることを「ジャクスタポジション」といいます。例えば、白骨にブロンズの髪のような対置ですね。詩的に生と死という問題を表現している秀句だと思います。

No.31 「靴下のかかとにいつも鎌鼬」

この句もとても良いですね。

<作品受付番号21番>

現代社会において日常・身の回りにある事象、社会現象、そういったものを果敢に取込み

ながら自分の俳句世界を作り上げようとしているところに感銘を受けました。

No.1 「コンビニの世紀コンビニで母殺され」

もはやコンビニがない日本は考えられませんよね。それを「世紀」と表現したわけですが、その当たり前であるコンビニで母が殺されると。17音の中に「コンビニ」が二回繰り返されていることにご注目下さい。17音の中で同じ言葉を2回繰り返すのは、はっきり言って無限に等しいことです。しかし、母が殺されるという非日常がコンビニという日常の中で成立している。こういった感覚に裏打ちされた作品が多かったと思います。No.9やNo.13もそうですね。

No.9 「ナッツは苦く人工知能も肉持つ時代」

No.13 「アイドルは力ほしがり歪む日輪」

現代に対峙しながら、そこに別物をぶつけることで自分自身の知的世界を構築しています。

No.77 「トマト腐る 緑の斜塔に立ち止まり」

No.85 「過疎の村に巨大な鯨が山車である」

No.92 「ブロンズの馬も言語の大花野」

No.100 「現代言語のかけらとしては寒い村」

これらの句を見てもわかりますが、非常にイメージのふり幅が大きいです。単なる写生に終わらない詩的な思想の光がみえます。

<作品受付番号23番>

オーソドックスに俳句の世界を作り上げていますが、斜めに切り込んでくるような凄みがあります。具体的には以下の句です。

No.6 「鮭下ろす不貞断罪するごとく」

No.24 「青鷺の鳴けばジュラ紀の夜に戻る」

No.28 「かつを食ふ目には前世の海の青」

いいですね「かつを食ふ」という当たり前の行為に、前世に見たかもしれない海の青さが蘇ってくると。前世を置くことによって主観的な奥行きが出ています。詩的な想像力の豊かさを体現した作品だと思います。私はこの作者の作品から最も多くの推薦句を取っています。しかし、ややオーソドックスにすぎるかなと思う部分もあります。

<作品受付番号26番>

No.3 「せんそうは嫌鶏頭が増えるから」

No.4 「試験管のうちはの傷実南天」

No.3、No.4など始まりの部分からして年齢が若い方の作品なのかなという印象を持ちました。と同時に「せんそうは嫌」というのはとても感情的な根拠のない発言ですよね。なぜ嫌かという理由は「鶏頭が増えるから」という不思議なねじれた印象を作品に与えています。

No.9 「くちびるの縷々浮かびくる秋の川」

No.10 「きつつききつつき好きだつて言つていい」

この繰り返しもさきほどの作品受付番号21番の作者同様に無限に等しいのであって、何か新しい感覚を盛り込むことに成功している作品が多いように感じました。

No.31 「鯛焼を食みてしづかに湿り合ふ」

No.36 「ひよろひよろとされど蕪でありにけり」

No.39 「赤いさざんくわ心臓が泣いてみる」

これらの句はいずれも感覚的には違和感はないのに、意味を深く考えてみると、その裏に新しい世界が連なってくるところがあると思います。

<作品受付番号56番>

No.16 「正しさのなんと危ふきジギタリス」

ジギタリスというのは心臓の薬になる植物（花）ですが、「危ふき」という言葉をのせることで植物・花がまるで違う姿を見せてきます。

No.6 「幼子とかぎろひに近きもの」

「幼子とかぎろひに近き」というのはどこか存在感が明確ではないにも関わらず明るさがあります。かつて日本語では「かげ」という言葉がそのまま「ひかり」を意味していました。ひかりとかげの重層がこの幼子にかかってきて良い句だと思いました。

No.36 「放られて不滅の桃となりにけり」

No.38 「うれしいが茗荷の花を喰つてみた」

いわゆる俳句的に良い俳句ではないかもしれませんが、おもしろいですね。何か思い切ったような、一見投げやりにも見えるのですが、実際は冷静な意識の中で言葉が選ばれているように感じ、感銘を受けました。

<作品受付番号78番>

非常に素直に今を生きる感覚というものを抽出している作品だと感じました。

No.2 「キョウチクトウ嫌いな人の名が綺麗」

嫌いな人の名が綺麗と、面白いですね。

No.4 「セロリ噛むひとつの恋を終わらせる」

No.7 「鬱になるちょっと手前の白すみれ」

No.12 「ただ咲いているだけなのに彼岸花」

No.29 「なぜぼくはぼくなんだろう春の海」

俳句という形式がありつつも、「自己が自己であること」という若さゆえに直面するものがみえます。亡命哲学者のベンヤミンは「幸せとはおそれをなく己を見つめることだ」と言いました。自分が齟齬なく自分であること、それが幸せであると。自分が自分であることの確証がないまま自分を見つめて、その目が世界と出会っている新鮮さがあると思います。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

城戸さん、ありがとうございました。作品受付番号23番は、対馬康子氏も推薦した作品になります。対馬さんから何かコメントがあればお願い致します。

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

<作品受付番号23番>

大人しい感じがしたが、秘めているものがある作者だと感じ選びました。

No.32 「遠花火愛の蒸発して永し」

「愛が蒸発して永い」という表現が現代的で面白いと感じました。

No.43 「みどり児の新しき靴秋の葬」

「みどり児の新しき靴」まではよくある句だが、そこに「秋の葬式」が続いているという意外性。さりげなく見えるけれども、詩的意外性があり、よく考えている作者だと感じました。以上です。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

対馬さん、ありがとうございました。それでは、次に齋藤 慎爾氏の評価・感想に移りたいと思います。齋藤さん、よろしくお願い致します。

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

私は俳人なのですが、漢字の違う「廃人（はいじん）」です。時代が病んでいる時に、詩人たる者は自分自身もまた病んでいなければならない、そうでなければ詩人ではないと。時代が病んでいる時にそれを健全である人というのは、道徳的に白痴だと言われても仕方がない。そういう意味で廃人を自称しています。俳句の本質というのは「俳諧」であり、否認に徹することが俳句の世界にインパクトを与えていると思っています。

第一回目から選考委員を務めていますが、今回の応募作品全体に関して一言でいうと「仰天」しました。まず、100句で140編もの応募があるということに驚きましたし、ここまでの水準のテーマを引っ提げて1編の作品として作り上げてくるのは、この芝不器男俳句新人賞だけではないかと思いました。本賞の歴史の中でも、今回の応募作品からガラッと印象が変わったと感じております。前衛俳句の金子兜太先生の一派もそうですし、その他に富沢赤黄男や渡辺白泉など、彼らがやらなかった事をやろうとしている作品が多かったです。確かに富沢赤黄男や渡辺白泉などは戦争から学んだもの、感じたものを現代俳句に反映させましたが、未来に残る俳句はいまだ出ていません（当時戦時中のため発表できなかったという理由ではなく、純粹に未来に残る俳句がなかったということ）。ただ、もしそういう人々が生きていたらどんな俳句を詠むのか、今日この芝不器男俳句新人賞が決まる時には、そのような俳句が選ばれるのではないかと思います。

今回の応募作品では、単なる若さとか反抗というのではなく、不条理の俳句が出てきています。どう評価したらいいか非常に難しく、頭を悩ませました。これまでの俳句の世界には存在しないような俳句、その代表的なものを選ばせて頂きました。この場では1つ1つの俳句に対する批評はしませんが、俳句の世界が変わるかもしれないと感じ刺激を受けた作品ということで、以下の作品に共鳴し選ばせて頂いております。作品受付番号1番、5番、22番、38番、44番、45番。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

齋藤さん、ありがとうございます。それでは、次に対馬 康子氏の評価・感想に移りたいと思います。対馬さんも第1回目から選考委員を務めていらっしゃいます。よろしくお願い致します。

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

この最終選考会というのは、我々選考委員も打ち合わせ等は一切なくこの場に臨んでおりまして、自らの俳句観を問われ、突きつめる場となっております。誰が受賞するのかについても、点数だけでは計り知れないところがありますので、今日もどういう展開になるのか予想がつかず興奮しております。

まず、城戸さんの選評に関しては、詩人としての見識のある選で、俳句を長くやっている者が無意識的に持ってしまう囲いがある俳句感とは違う目線からの批評で「なるほどな」と頷きながら聞いておりました。自分なら選べない句でも、城戸さんの説明を聞くと説得力があり、面白いなと思いました。

そして、齋藤さんが選んだ5編をみると確かに非常に冒険的です。今回の応募作品は、全体的に奇をてらった表現というよりも、どうしたら新しい表現ができるかという事を突き詰めた作品が多いと感じました。それを選考委員としてどう評価するのか、自分の中でもまだ結論が出ておらず、選考委員皆さんの選を聞きながら最終的に結論を出したいと思っております。私の担当は、作品受付番号13番、54番、68番、87番、101番、105番、136番です。

<作品受付番号13番>

ややオーソドックスかと思うと、へんなところで肩透かしがあり、淡々と自分の姿を映し出しているという感じがしました。詩的とか抒情性とかいうのとは違う俳句目線を感じました。例えば、No.4の句。

No.4 「てふてふにうすき砂丘の空気かな」

「～かな」という形でオーソドックスですが、「うすき砂丘の空気」というのは表現が最新で非常に印象的でした。

No.21 「夕立の匂ふ包帯ほどきけり」

「夕立の匂ふ包帯」という繊細な部分を表現されていて良いと思いました。

No.33 「空高きことにも触れて弔辞かな」

心の隙間をちゃんと表現していると感じました。この作者は、なかなか淡々としていてその中に詩の芯の重たいものがあるという印象を持ちました。

<作品受付番号54番>

福島若者のかなと思いました。

No.1 「陽炎也立入禁止区域前」

漢字だけで詠んだところに作者が表現したいものが立ち上がってくる感じがします。

No.2 「なくなった家を見ている子猫かな」

No.21 「春雲も詰めて避難区域去る」

仮に福島だとすると、とても悲しい出来事なのですが、「子猫」に着地しているところ、「春の雲」を詰める、に何か救いのようなものを感じました。

No.16 「ふらこここもかげをなくなったなくなった」

とても直情的です。ほかにも直情的に表現した句がいくつかあるんですが、それは事実をもとにしたものであれば説得力があると思います。例えば、No.33の句。

No.33 「原発を隠してすすき原は伸び」

No.9 「流された駅を透かして秋の海」

景色を直接的にそのまま表現していますが、その地においてその景色を体験した人でないと詠めないと思います。また青春性が表れた心情的な句もあります。例えば、No.58の句。

No.58 「手袋の分の隙間も嫌だから」

抽象的だけれども、若者独特の「届きそうで届かないもの」を感じられて良い作品だと思いました。

<作品受付番号68番>

ドライな感覚といいますか、面白い感覚を持った作者だと感じました。他に予選を通過している作品受付番号1番や2番の応募者とは少し違い、俳句の表現の中で現代的なものを表そうとしている力を感じました。例えば、No.4句は面白いですね。

No.4 「端欠けて光る昆虫用ゼリー」

「端欠けている」というのがいかにも昆虫の肢体らしく写生が効いていて、それだからゼリーが光っているとは、そこに若者の痛みがあると感じました。

No.17 「掌が桃を離れて柔らかき」

桃が掌から離れるのではなく、掌が桃を離れてそれが柔らかいと、面白い表現方法ですね。

No.41 「クリスマスリースに飛び込めば夜空」

クリスマスリースの輪に飛び込めば暗い夜空。明るさの中にも屈折感があります。

No.66 「ヨーグルト掬へば崖のうらけし」

この句はとても不思議に感じました。なんでいきなり「崖」が出てくるんだろうと。ヨーグルトを掬って、そして崖がうららかだという、その繋がり飛躍。

ほかに No.24、No.60。

No.24 「水筒の氷の鳴りて椿の実」

No.60 「焚火から一番遠い人と消ゆ」

溢れる青春性の前のめり感を少し抑えたような飛躍が面白いと感じました。

<作品受付番号 87 番>

正統派の作り方だと感じますが、俳句らしさを追及して何を詠むべきかがわかっている。作者の真摯さが素直に響いてくる作品です。

No.4 「たひらかに鉱石図鑑開き春」

鉱石図鑑が良いですね。鉱石に見える地球の時間と現代の時間とのつながり。

No.13 「納めたる雛ひとつに箱ひとつ」

いかにも俳句らしく、お雛様に対する丁寧な描き方、そこに家族愛を感じました。

No.17 「ブラインドかさと折れて風信子」

日常の一コマを綺麗に切り取っていて、实景に現代を生きる心情が反映されています。

No.39 「草笛を吹くとき肩のあがりやう」

さりげないけれども、確かにそうだなと思う部分をしっかりと表現できる作者であると思いました。詩的で好きだったのが No.56 の句です。

No.56 「箱庭の夕日へすこし吹く砂金」

箱庭の夕日というのはどんな景色なのでしょう。そこに風が吹いてきて砂金が動いた。ほかに No.50、No.86。

No.50 「あかがねの山河額に持つ蘭鉢」

No.86 「毛糸編む膝にあふるる大河編む」

創造性のある感覚がこちらにも伝わってきて、生活実感にうまく詩を見出しています。

<作品受付番号 101 番>

詩的で大胆な飛躍が特徴の作品です。俳句と詩の接点が緊密にせめぎ合っている。

No.1 「溺死たとへば最後に腐る胃の獅子唐」

齋藤さんもおっしゃっていましたが、俳句表現でどこまで冒険するかというギリギリのラインかなと。もしかすると、内容的にこれは俳句ではないと感じる方もいらっしゃるかもしれません。

No.18 「死後も読書するなり花梨がこはれてゐるけど」

この句を有季定型を守り文語表現に直すこともできるのではと思いますが、実際はできません。それでは表現し切れないためこういう形になっているのだと思います。「なぜ現代仮名遣いを使うのか」という事をよく考えるのですが、この作品は、有季・定型・旧仮名・

文語が俳句の王道であるということを踏まえながらもそれとは異なる世界の、何かこれまでの俳句でない表現を試行していると思います。

No.33 「鶴の何處を撃ちてもみどりごやはらかし」

とても複雑な世界。五・七・五ではないため読むのにスラスラといかない、考えさせられる作品だと思います。定型でないことで表現が広がる可能性を考えさせられる作品だと思います。

No.56 「藤棚に素足は人を離れつつ」

「人は素足を離れる」という逆転の発想が良いです。

No.8 「東方を征せよ梨が下手に剥け」

No.92 「向日葵は乳房のはざまにも重たし」

外界には見えないものを心中に取り込んで表現しています。

<作品受付番号105番>

いままで俳句が築き上げて来たものに、自分の作風も踏まえながら、なかなか難しいものを内に読み込もうとしている。言葉が洗練されているので、サラリとしていながら、いざ解釈しようとするとき複雑。若さゆえに経験は多くないわけですが、知的な言語体験を心に刻み込むように、古典的表現の上にかく自分の新しさを出せるかに挑戦している作者だという強い印象を受けました。

No.8 「冷えながら届く日差やあやめぐさ」

陽射しが暖かいというのはよく詠まれる事だと思いますが、この「冷えながら届く日差」というのがこの作者の雰囲気というか、体の芯にある詩心みたいなものを感じ惹かれました。「冷える」とか「冷たい」という言葉が随所に使われている作者でした。例えば No.47 の句。

No.47 「冷えし菊袖口に腕さはりけり」

袖に触るのではなくて、「袖口に触る」、そして袖口が触れている腕の冷たさまでも表現しており、ヒヤッとする感覚の句でした。

No.70 「ときじくの躑躅の花の氷りもす」

No.81 「春の雲花入れし炉のつめたさに」

「炉」は原子炉など色々ありますが、春という爛漫さと対比する冷たさというのが、なかなか詩的だなと思いました。この冷たさと言うのが、青春の悼みのようなものとして全作品に感じられました。

No.86 「詩を書いてみた三月の詩が残る」

震災の鎮魂の作品でしょう。淡々と繰り返すところが、それこそ心の冷えに隠されたジレンマ、詩を書かざるを得ない切なさを感じさせる句でした。

No.53 「木仏のつかのま青き雁の頃」

No.85 「大きな花涅槃の海へ流れけり」

内に秘めた、喪失感のようなもの、そこからより深い世界に手を伸ばして表現していきたい作者の思いが伝わってきました。

<作品受付番号136番>

五・七・五に収まらないような、自分で持て余している感じがします。言いたい事はいっぱいあるのだけれども、有季・定型に収めるにはどうしたらいいか思い詰めているように感じられる作品でした。

No.2 「くちびるが先にまぶしくなる冬日」

唇が冷たい・暖かいというのはよく詠まれていますが、「くちびるが先にまぶしくなる」というのはとても繊細な表現だなと思いました。

No.8 「何万回目の初雪いもうとの庭に」

人間1人にとっては初雪というのは何十回しかありませんが、地球などにすると何万回もの初雪があるわけで、「何万回目の初雪」という表現が印象的です。

No.20 「あたらしいフォントの茶摘唄つたない」

「フォント」という現代的な言葉を使いながら、「茶摘唄つたない」というオーソドックスなところに収めているアンバランスな面白さを感じました。

No.86 「かんむりふらせ夏蝶がうまれる」

No.96 「めがねの跡おもいだすとき柚子の花」

No.97 「百合いつかひとをわすれる街にきて」

若さの切なさのようなものが表現されている。感受性に富んでいる作者だと思います。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

対馬さん、ありがとうございました。それでは、次に中村 和弘氏の評価・感想に移りたいと思います。中村さんは現代俳句協会の会長でいらっしゃいまして、今回初めて芝不器男俳句新人賞の選考委員を務めております。よろしくお願い致します。

選考委員：中村 和弘氏（俳人）

様々な俳句新人賞の選考委員をしてきましたが、この芝不器男俳句新人賞の良いところは、非常に領域が広いということです。

私が20代後半の頃に、ある雑誌からの依頼で評論を書いた事がありました。そのタイトルは「アバンギャルドとドキュメンタリー」というものでした。アバンギャルドというのは前衛という意味です。当時、芸術で先端を走っていたのは映画でした。イタリアのネオリズムとフランスのヌーベルバーグは多くの文学青年に影響を与え、これは俳句にも影響があるのではないかという事をこの評論に書いたわけです。最近、私が不思議に思うのがいつの間にか「アバンギャルド」という言葉が消えてしまったという事です。かつて、俳句の世界では頻繁に使われていた「アバンギャルド」という言葉が消えてしまった、これは私は

大変に問題であると思うのです。若い方々には、新たな前衛とはどういう風にあるべきか、という事を考えてほしいと思っています。

私は、俳句は映像表現に非常に大変よく似ていると感じておりまして、それは特に新しい考え方などではなく大正時代に既に寺田虎彦が俳句はモンタージュの文芸なんだと言っていました。また、数年前に出たある本の中で、金子兜太先生が「私は長年俳句という映像を追及してきたような気がする」とインタビューに回答していました。今まで金子兜太先生がそのような事をおっしゃっていたのを聞いたことがなかったので非常に驚いたのを覚えています。今日、このような事をお話しするつもりはなかったのですが、この場に来てふと思い出しましたので前置きとしてお話させて頂きました。

それでは、批評・感想に移りますが、私の担当は、作品受付番号 33 番、35 番、51 番、58 番、59 番、84 番、107 番、114 番です。

<作品受付番号 33 番>

とても抒情味の強いところがありますが、見方が新鮮だと感じました。例えば No.4 の句。

No.4 「河豚の死に酸素を送る生簀かな」

河豚が死なないように（ひょっとしたら半ば死にかけたフグが浮いているのではと思うのですが）、そこに酸素はどんどん過剰なほどに送られてくる。これは現代の何かを暗示しているような感じがしてきますね。この作品を通して作者が言わんとしていること、実はそれが俳句なんだと思います。作品の裏側に大きな世界を感じさせてくれるかどうか。

No.22 「雪下ろして見てゐる梯子を握りしめ」

これも情景が見えてくるじゃないですか。短い中でここまで表現できるということに俳句の良さがあるのではないかと思います。

No.61 「本棚の裏で縮んでゐる風船」

日常さりげないことなのだろうけれどもなかなか気が付かない。これも裏に何かあると感じさせる句ですね。

ただ、No.29 や No.36 のような句はやや疑問に思います。

No.29 「髭面（ひげづら）の愛嬌ぬつとおでん屋に」

No.36 「如月の短さ恋文書き直し」

やや通俗的ではないかと思います。この作者に追及してほしいのは、No.4 の句の様な世界です。アバンギャルド的にいろんな世界が俳句から開けてくるような気がします。

<作品受付番号 35 番>

No.27 「祝祭の街に鹿いる揺らぎかな」

「揺らぎ」という部分、作者の揺らぎも感じさせ良い句です。

No.11 「もらひたるマフラー巻いたまま眠る」

負の世界、昔の言葉でいうと「ハレとケ」。昔はハレとケの両方が潜んでいる句が良いと

されていましたが、この No.11 の句は明るさの中に死という負の気配も漂ってきます。そこをしっかりと捉えた作者の認識を尊しとしたいと思います。

詩人の嶋岡晨さんが「詩のある俳句」という題の本を出版しています。「詩のある俳句」と言わなければならない程に「詩のない俳句」が蔓延しているという事でしょう。写生という名目のもとに詩性が薄い俳句がかなり多くなっているという気がして不安です。このような作者の詩性（ポエジー）、これはとても尊いものだなと思います。

<作品受付番号 5 1 番>

この作者は確かな認識を持っているなと感じました。

No.24 「胡桃触るなじむほどふたしかな手」

最初は胡桃の感覚が新鮮に掌の中にあるが、なじむに従ってあやふやになっていく。これは一つの世界じゃないですか。なじんでいくほどに意識の中で胡桃が胡桃でなくなっていくというところ。これは No.87 の句にも相通ずるところがあります。

No.87 「ほほゑんでをらねばくるし草の花」

作者には一つの視点があって良い感性だなと思いました。このあたりぜひ伸ばしてほしいと思います。そうすると作品が立体的になってくる。例えば、No.82 の句。

No.82 「一面のひまはりに背かれてをる」

ひまわりは明るいはずなのに、背かれることによってある種の陰りを持ってくるという、作者のこの感覚は尊い。

<作品受付番号 5 8 番>

今回、応募数が非常に多かったため、作品に ABCD とランクを付けて評価したのですが、A 評価はこの作品受付番号 58 番だけでした。大変感銘を受けました。人を感動させてくれる作品というのは単純に良いです。自分の心を、ある時は豊かに、ある時はどん底に落とされる、そんな感覚を持った時の感動、これは大事だと思います。この作品には心を打たれました。この作者は感性が非常に豊かで、俳句人格というのか、一つの世界を確立しており驚きました。100 句揃えるというのは大変な事です。それがこれだけの水準で作品を揃えられる。そして、どの句を詠んでも作品の中に作者自身がいる。俳句という定型や季語というものを肉体化していると言っても過言ではないくらいです。例えば、No.37、No.56、No.60 の句。

No.37 「疼痛のたとへば花の水面かな」

No.56 「仏壇は真桑瓜より軽からむ」

No.60 「夕立は浮きたつものと皿小鉢」

ほんの日常的です。俳句は日常的なものが基本であるという事は言うまでもない事です。遠くにあるものではなくて身近にあるもの。

No.50 「雲は雨後輝かされて冷やし葛」

「輝いている」のではなくて「輝かされている」というのが作者の表現力・個性を感じます。

No.82 「輪の如き一日が過ぎ鳥瓜」

こう言われると、はたと「一日は輪廻なのかもしれない」と宗教的なことまで感じさせてくれます。

<作品受付番号59番>

やや古風だが、抒情性が非常に豊かです。例えばNo.25の句。

No.25 「ゆふぞらをランプのごとく石鹼玉」

古典的なようでいて何か新鮮なもの。ある光を持ちながらゆらゆらとシャボン玉が消えていった、それを「ランプのごとく」と表現したところ。面白いです。

No.48 「メロン食ふたちまち湖を作りつつ」

これも面白いです。詩性（ポエジー）があってよろしいと思います。

<作品受付番号84番>

この作品は即物性を感じました。即物的に把握するということ。「乾いた抒情性」という言い方をしますけれども、俳諧にもそこに通ずるものがあると思います。例えば、No.2、No.5の句。

No.2 「白壁を這う夏服の電気技師」

No.5 「沈黙の一座見廻す扇風機」

「扇風機が見廻す」という主客逆転させています。扇風機の方が動きがあって人を見ているという面白さがよく出ていると思いました。

<作品受付番号107番>

1句とても気に入ったものがあります。この1句でこの作品を選ばせて頂きました。今回の応募作品の評価は非常に難しいです。例えば、100句が平均的に良い作品もあれば、100句の中で2〜3句非常に良い句がある作品もあり、頭を悩ませます。仮に全14,000句の中から30句のみ選べと言われたら、この場で批評されている予選通過者の作品は選ばれていない可能性もあります。

いずれにせよ、私が気に入ったのはNo.79の句です。

No.79 「葉が幽霊よりもどつとある」

この面白い感覚を伸ばしてほしいと思います。

<作品受付番号114番>

No.28 「ぼうたんの揺るる読経でありにけり」

「ぼうたん」と「読経」に実際の関係はないのですが、なんとなくその両者の関係が揺れ

ているような感じで感合されています。

ただ、この作者に一言言いたいのは、「類想感」がある。例えば、No.8 の句。

No.8 「木苺の花の苺になるところ」

苺と苺、似たような句を見たような既視感を覚えます。同じく No.24 の句。

No.24 「枯れ薔薇の掠れ鳴りたり薔薇の中」

これも花と花、今こういう重ねるような表現が流行っていますので、それにはまらないように気を付けてほしいと思います。期待しています。更に No.77 の句。

No.77 「黒板に桜描かれて散ることなし」

非常に理屈的で当たり前じゃないかと言いたくなってしまう。

No.38 「早退や昼の月とはあな白き」

この句の内容はとても面白いです。「昼の月」に後ろめたさが漂ってきます。人間臭さ、ここは評価したいと思います。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

中村さん、ありがとうございました。それでは、次に西村 我尼吾氏の評価・感想に移りたいと思います。西村さんはこの芝不器男俳句新人賞を立ち上げられた方でして、これまで実行委員長を務めていらっしゃいましたが今回は選考委員としてこの場にいらっしゃっております。よろしくお願い致します。

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

14,000 句、技術点、芸術点、構成点等、全ての句に点数を付けました。100 句作られた応募者の皆様の努力を加点方式で評価したいと思ったためです。私の評価に関しては、応募者 140 名が 0.5 点差で順位付けされております。また、私の担当作品につきましては、キャッチフレーズを付けさせて頂いております。それでは、批評・感想に移りますが、私の担当は、作品受付番号 1 番、14 番、28 番、34 番、45 番、81 番、95 番、100 番です。

<作品受付番号 1 番>

キャッチフレーズ：放浪の野生児

私は現在ジャカルタに住んでおりまして、イスラムの世界に暮らして約 10 年になります。IS（イスラミックステート）の問題というのは喫緊の課題で、私が住んでいるインドネシアまたは中東などでもテロがございます。恐らく、この作品は中東や中南米、アフリカ等を旅された若い詩人のものなのではと思いました。危機と隣り合わせる人々の生活の中に入り込んだ現代的で臨場感にあふれた優れた作品であると思います。例えば、No.17、No.27、No.53、No.81、No.86 などの作品が特徴的であると思います。

No.17 「暮の市滅びし国の玩具買ひ」

No.27 「首都の宿踏絵とされし敵の顔」

No.53 「焚火越し座れるものの眼を見るな」

No.81 「不死鳥の今日もかからぬ囹圄」

No.86 「吹き込みし風奏でたる秋の声」

<作品受付番号14番>

キャッチフレーズ：デジャヴューの色の魔術師（※本人は不本意かもしれませんが、ポジティブな意味でこのキャッチフレーズを付けさせて頂いております）

特に No.1～No.44 句までは、新古今的な既視感を多に活用して、適度な新しみを表現しています。この作者は近代俳句の成果をよく勉強して作っておられると感じました。そういう意味で既視感がありますが、それを新古今的に利用しているという点で評価しています。しかし、まだ越えられない一線があると感じる部分もありました。

No.1～No.44 句まではその意味で、既存の俳壇で特選に入るような句が多くありましたが、この作者の個性が、そういう形ではなく現れている作品として、No.45、No.71、No.80、No.81、No.87 は良い句だと思います。

No.45 「包み込む息の影のある石鹼玉」

No.71 「黒々と降り注ぐ夜の蟬の声」

No.80 「人の目のぎらぎら光る夜店の灯」

No.81 「手花火の明るさ家族ひとつ分」

No.87 「蠮螋の猫のごとくに顔洗ふ」

<作品受付番号28番>

キャッチフレーズ：異界を開く者

私は一年に地球6周ほど出張をしますが、芝賞の作品を読むために、ここ1か月以上のすべての飛行機の中、ラウンジでの待ち時間、休日、夜を費やしました。この作品を読んでいる時、大変重要な連絡が入り、心が緊張し、乱れたのを覚えています。魔の刻。この作者の作品は読者の不安な心理にするすると入り込んで、読者を異界へと誘いこむ魔力があります。魔術が解けて我に返ると、コンテンポラリーな流行を踏まえた、シニカルな作者の視線を No.25、No.40、No.64、No.78、No.83 の作品が示しているのに慄然としました。

No.25 「異類婚姻譚注釈が夕立」

No.40 「バーコードバトラー放す夏の川」

No.64 「隙間風文字を知らないひと踊る」

No.78 「緯度の服では出かけられない夏霞」

No.83 「性的な落書きになるかたつむり」

<作品受付番号34番>

キャッチフレーズ：抽象の槍を光らせて

ジャーナリストでもあり、哲学者でもあった正岡子規にも多くの優れた抽象句がありますが、虚子の眼から見た子規像からは排されてきました。その流れの中に「硬質の叙情」という言葉がありますが、そういう世界を体現していると思います。また、この作品は近代俳句からの跳躍という勇氣を持っています。近代俳句から跳躍するにはどうしたらいいかという事に対峙した時に、この作者がとった手段は抽象の槍を光らせるという事だったのだと思います。No.30、No.40、No.49、No.84、No.99の作品によく特徴が出ています。

No.30 「青芝に天使の痛覚のはなし」

No.40 「ビジネスの眼で噴水を消しながら」

No.49 「飛び降りるなら秋風の曲がるところ」

No.84 「目覚めた部屋に知識のやうに金魚鉢」

No.99 「曇天に鶴の芯の抜かれあり」

<作品受付番号45番>

キャッチフレーズ：俳句交響詩

この作品は、私の好きな星野之宣という漫画家の『2001 夜物語』という SF 漫画作品を思い起こさせました。4部構成になっています。この作者は時間軸をずらせながらも、起承転結の中で現代俳句の達成して来た、自分の技量を示しながら、最後はそれを全部投げ振り捨てて音の世界で勝負しています。まず、No.1～No.30句までは、いわば、「生命体としての地球、ガイア」という章で始まります。

No.11 「産声のかたちに春の海しなる」

No.20 「弓なりの山鈴なりの青時雨」

次に No.31 の句からは「とりとりの鳥」の章。この章が最も難解な部分でして、私も本当のところまだ十分に理解できていないのです。しかしながら、人類の未来、滅亡の後の再生のような、「そうである」と確信させるような力をもった作品となっています。

No.33 「口中に鳥の臍を飼うや 寡」

続いて、No.51～No.71句まで「巨人譚」とでもいうべき章が続きます。かつて地球に住んでいたかもしれないタイタンのようなものを彷彿とさせる作品が続きます。

No.53 「星砕くごとく静かに虫砕く」

No.58 「塵殖ゆる月光骨の佇立かな」

そして、No.72～No.100句が最終章の「万緑の獄」になります。時が形を形成し、ブラックホールの底へと収斂することで獄が閉じられます。

No.85 「ぐわらがげら壱なる時の長い舌」

俳諧連歌は36句ですが、水無瀬三吟の100句の世界を独吟するこの作品は新しい俳句交響詩になっております。

<作品受付番号81番>

キャッチフレーズ：残像の旅人

記憶、懐かしさ。過去と未来は、現在によってつながっています。現在は過去になり、記憶、懐かしさの中に、人は、未来を現在として迎えます。この作者は、現実を詠いながら、永遠の現在を浮遊している作品群を創りだしました。No.42、No.60、No.65、No.82、No.93がそれを表しています。とても良い句だと思いました。

No.42 「埋葬のようにレジ開く半夏生」

No.60 「百年は泉のごとくランプさす」

No.65 「向日葵のさまざま割愛されており」

No.82 「渡り鳥が焼きついている家族写真」

No.93 「映像を絞りつくした檸檬かな」

<作品受付番号95番>

キャッチフレーズ：自縛の騎士

若き日の岸本尚毅を彷彿とさせる作品群です。季題を駆使しながらも飽き足らず、心地良い写生を効かした作品を示しながらも納得していない。心に禁じ手を持ちどうしても超えぬ一線を引いています。その禁じ手による抑制が凛々しいと思います。

No.7、No.16、No.58、No.72、No.80がそれを表しています。特にNo.80は白眉だと思います。

No.7 「留石を堅く縛れる秋思かな」

No.16 「金貸に菊を返せる菊人形」

No.58 「武満忌濑み掬へば澄んでゐる」

No.72 「逃げ道を多く拵へ壬生狂言」

No.80 「ハンカチは頬の固さにして仕舞ふ」

<作品受付番号100番>

キャッチフレーズ：小津安二郎的世界

これは大問題の作品でして、最初見たときは怒り心頭だったのですが、どうしても頭から離れず選ばせて頂きました。この作品は全ての句が、最後は「～です」となっており、その前は名詞というアルゴリズムになっていますので、コンピューターに深層学習させて作っているかもしれないと思いました。そうすると、私はコンピューター作品を選んだバカ選者ということになりますね。ただこれは人間の作品だという確信があります。この作品も作品受付番号45番と同じく俳句詩を描いています。明らかにNo.1とNo.100の句は人にしか

詠えない句であり、これらの句をみるとこの作者はその他の98句をある意図をもって書いている。本当は通常の手練れではなく、いくらでも巧い句が書けるのだらうと思いました。

No.1 「ポスターも夙責めの砌です」

No.100 「弧を引いて離ればなれの燕です」

この作品全体が小津安二郎作品のような映像を描いているのです。高校卒業、受験合格、恋愛、失恋、就職、帰郷など、兄と弟などの青春群像を淡々と描くことにより100句で1つの抒情作品として表現している。1つ1つの句自体はいわゆる準佳作二の世界のものが多いですが、100句全体で見たときに1つの作品として浮かび上がってくるものがあります。これをどう評価するのか、非常に難しいです。この作品は恐らく芝不器男俳句新人賞にはならないでしょう。しかし、私がここで推さないとその新しい取り組みは見過ごされてしまう、そういう思いで選ばせて頂きました。

(その他に3句上げるとしたら以下の句に共感しました。)

No.27 「アネモネの肥育ノートが端緒です」

No.40 「あめんぼに光の滓の少しです」

No.73 「箱詰めの檸檬5キロが返事です」

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

西村さん、ありがとうございました。今回の第5回芝不器男俳句新人賞では、第1回目の芝不器男俳句新人賞で城戸朱理奨励賞を受賞した関悦史氏に特別賞の選考を頂くことになっております。関さんから、これまでの批評・感想に関して何かコメント等ありましたらお願い致します。

特別賞選考委員 関悦史氏（俳人）

特別賞は予選通過者に限らず全応募作品140編の中から選ぶ賞になりますので、私も14,000句全て読ませて頂きました。全体を通してみると（これが芝不器男俳句新人賞の特徴と言えるのかもしれませんが）、100句全体を使って何かを表現しようとしていたり、特殊なコンセプトやテーマのもとに100句を構成しているような作品が多いと感じました。もし、その様な規格外な作りの作品で優れたものが予選から漏れていれば、そこから特別賞を選べば簡単に済んだかもしれませんが、蓋を開けてみたらその様な作品のほとんどは予選を通過していました。

かつて前衛的だと言われていたやり方が、そのまま前提となるとは限らない時代になっています。何でもありな時代の中で新しい表現を模索するのは非常に難しく、全140編の作品の中からその様な優れた作品を探したいと思っております。

4. 芝不器男俳句新人賞受賞者の選定議論

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

関さん、ありがとうございました。それでは、これより選考委員全員による議論に移りたいと思います。

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

まず、西村さんが評価していた作品受付番号 100 番に関して意見させてください。100 句で大きなテーマを詠んだという満足感のようなものが本人にはあるのかもしれませんが、そういう鑑賞の仕方は成り立たないのではないかと。つまり、100 句全体としての大きなテーマも良いのですが、個々の句の評価というのをきちんと見ないといけないのではと思っています。例えば、No.16 の句。

No.16 「ラガーらの試合終わりの唱歌です」

この句に非常に似ている句に新興俳句の横山白虹さん（寺井谷子さんの御父上）の「ラガー一等のそのかちうたのみじかけれ」という句がありますね。この2つの句は「ラガー」や「うた」など非常によく似ていますが、全然違います。作品受付番号 100 番の句はただ試合が終わっただけで、そこで止まってしまいます。一方、横山白虹さんの句は、青春という時間を思いきり戦って、その戦いが終わった後に勝利のうたを歌う。そして、その勝利のうたが短いという部分には、戦った相手への尊敬や配慮というものが感じ取れますよね。100 句で表現しようとする大きなテーマというものも確かに存在するのだけれども、個々の俳句もないがしろにはできないということを言いたいのです。

今回の応募作品の中には、作品受付番号 100 番と同じように、100 句で大きなテーマを詠もうとしている作品がいくつかあります。例えば作品受付番号 1 番は、ドフトエスキーの『悪霊』のキリーロフとスタヴローギンの会話を彷彿とさせるような世界観があります。人間の罪と罰というか、世界の終末観のようなものが描かれているわけです。大きなテーマを提起しつつ、個々の句の力もしっかりしています。例えば、No.10 の句。

No.10 「源五郎までは喰ったが田亀とは」

日本人が世界からどう見られているかといいますか、そういう視点が含まれているように感じます。日本人兵士が南に行って何を食べていたかと想像してみると、ものすごいものを食べていたのですね。

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

質問に回答します。ご指摘の点は、非常に悩ましいところでして、作品受付番号 100 番は技術点、芸術点のみで評価すると全体の中で 135 位前後なんです。齋藤さんのおっしゃる通り、私も最初は相手にするべきではないと思っていました。しかし、どうも心の中から離れないのです。よく見てみたら、この作品は既存の五・七・五、有季定型に対して、新し

い定型を提示しているのです。「です」を抜くと全部で15音になりまして、「です」の前は全て名詞で終わっています。また、「です」を抜いて、よんでみると全然イメージが違います。1つ1つの句がもっとシャープに際立ってくるのですが、それをあえて「です」を入れることで薄めています。

齋藤さんのおっしゃるように、この作品は「只事」です。通常、発句と違って付句は際立ってはいけないのですが、付句のようにその独自性をあえて入れずに只事を伝えながら全体として表現しています。この作品は兄と弟その他の人との淡々とした青春の4年間の春夏秋冬の出来事を描いているわけです。

最初はコンピューターで作っているのではと思ったのですが、最後のNo.100の句で旅立ちを詠っています。少なくとも作品として際立とうとして作っているのは、No.1とNo.100の句ぐらいです。

No.1 「ポスターも夙責めの砌です」

No.100 「弧を引いて離ればなれの燕です」

それ以外の句は淡々とした出来事を連句的に繋げているだけです。なので、これは芝不器男俳句新人賞には成り得ないでしょう。これを認めてしまうと、この4年間死に物狂いで100句作って精進して予選を落ちた応募者たちに対して申し訳ないと思います。しかし、今繰り広げられているこの様な議論が巻き起こってほしいと思って、勇気をもってぶっこんでみようと思ったわけです。

そして、作品番号1番は思想を内包していて良いのですが、No.5やNo.18などはこれだけでは作品として成り立たないでしょう。

No.5 「玉葱に挽肉を詰め焼ひたもの」

No.18 「行く年やあなたの上に平和あれ」

この作者もある種の俳句詩を描こうとしているわけで、1つ1つの句を取り上げて作品全体としてのモチーフを否定してはいけないという思いが私にはあります。従って、1つ1つの句の技術性、芸術性を評価するとともに追加で（加点的に）全体構成に関する評価をするべきではないかと考えたわけです。

齋藤さんの意見に反対するわけではありませんが、「です」の使い方というのは注目すべきかと思います。

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

それは、「です」と「かな」の違いということですか？

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

「かな」は発句の切れ字です。一方、「です」は切れ字ではないと感じました。「です」を付ける事で、次に繋がっていく。「です」がある状態で全体をよみ通してみると、全ての俳句が静かな音で繋がっているようなイメージがするのです。映像が繋がっていくためのバ

ックミュージックのようなものかと思いました。逆に「です」を抜いてよんでみると全体のイメージがガラッと変わるので、そういうトリッキーな仕掛けが含まれていると思います。テクニックを競う若者のスノビッシュ (Snobbish) な野心に対して、予選は通過させるべきかと思った次第です。

コーディネーター：筑紫 磐井氏 (俳人)

この芝不器男俳句新人賞は、ある種の実験賞のような側面がありまして、過去の選考会でも実験的な作品が挙がり評価が割れたことがあります。当時、相当話題になりまして俳壇にも影響を与えたのではと言われているほどです。そういう意味で、この芝不器男俳句新人賞は実験的な作品を否定しません。ただ、その作品をどう評価するか、そこが重要であり、この選考会の意義であると思っています。

選考委員：対馬 康子氏 (俳人)

そういう意味では、齋藤さんは、全ての句に「教祖」という言葉が含まれている作品受付番号 44 番の作品も選ばれていますが、この作品に関してコメントをお願いしますか。

選考委員：齋藤 慎爾氏 (俳人)

作品受付番号 44 番の作品で面白いと思った点は、No.9～No.25 句までは春で、No.26～No.50 句までは夏、次に秋がきて、最後に冬が来ているんですね。

また、例えば No.12～No.18 句のように、教祖が何かする時に「時間に並行」、「空間に並行」、「真理に並行」という様な言葉が入るんですね。この言葉自体が、この作者にとっては五・七・五の初めの「五」にあたる作りになっています。そして、それらの言葉に続く「七・五」で描く教祖の振る舞いがぴったり合っているんです。

No.12 「時間に並行 春の雷追ふ教祖」

No.13 「空間に並行 春の暁吸ふ教祖」

No.14 「真理に並行 春の山道往く教祖」

No.15 「神意に並行 春の憂鬱知る教祖」

No.16 「我欲に並行 春の夕焼蹴る教祖」

No.17 「啓示に並行 春の理科室去る教祖」

No.18 「倫理に並行 みづうみ呑む教祖」

最近の報道で、オウム真理教の死刑囚が複数の拘置所に分散させられたという出来事がありました。これは死刑執行が近づくということなのでしょう。この作品を詠んでいて、私にはこの報道が背景として浮かび上がってきたわけで、何か一つの時代が終わろうとしているような雰囲気を感じました。俳人の江里昭彦さんがオウム真理教の中川智正死刑囚と共に『ジャム・セッション』という俳句同人誌を創刊していて、私も原稿を頼まれて書きましたが、彼らは本当に良い俳句を作っているんですね。そういう事も思い出しました。

この作品の中の教祖は必ずしもオウム真理教のことに限らず、読み手ごとに宗教界とは異なる色んな教祖という形があると思います。そういう意味でぜひ皆さんによんでほしい作品だと思いました。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

齋藤さん、ありがとうございました。それでは、これから絞り込みに入りたいと思います。なお、予算通過作品の中で選考委員の選が重なっている作品を以下に示しておきます。このこともご参考頂きながら、選考の議論を進めてまいりたいと思います。

作品受付番号1番：西村さん、城戸さん、齋藤さん

作品受付番号58番：対馬さん、西村さん、中村さん

それでは、これまでの議論を踏まえた上で、各選考委員から推薦作品をいくつか挙げて頂きたいと思います。まず城戸さんから順番にお願いします。

選考委員：城戸朱理氏（詩人）

有季定型や写生といったものを突き抜けていくような実験があっても良いのではないか、具体性に即ただけで実相が表現できるのか、そういった意見が出ましたね。一方でアバンギャルドである事がいかに難しいかという事を関さんがおっしゃっていました。20世紀のアバンギャルディズムというのは、機械文明の発達に伴う生活の変化に起因します。具体的に言うと、無線通信の発見とライト兄弟による飛行機の発明ですね。遠くにいる人にすぐに会いに行くことができる、遠くにいる人とのコミュニケーションが可能になるという大きな社会的変化があったわけです。1909年にイタリアのマリネッティが「未来派宣言」を発表し、1914年の第一次世界大戦前夜にルーマニア詩人のトリスタン・ツァラがスイスのチューリッヒでダダイズムを宣言、このダダイズムが飛び火する形で1924年にフランス詩人のアンドレ・ブルトンがシュルレアリスムを宣言します。このように社会の変化と共に前衛運動というのは常に発達してきました。

では、ここ20年はどうか。我々はもっと大きな変化に直面したはずですが、それは、インターネットの普及による情報技術の洪水と情報へのアクセス方法の変化です。ならば、もっと現代は大きく変わっていいはずなのに、関さんがおっしゃったように、あまりにあらゆる情報が溢れていて何でもありな状態となっており、かつてのようなムーブメントという現象になっていないのではないのでしょうか。

作品受付番号58番に関しては中村さんが評価していましたが、私もこの作品からの選句が多くあります。ただ、私の視点から見ると、うますぎるというか、従来の俳句的というか、枠から大きく外れていないという点で私は推薦していませんでした。

作品受付番号44番は私も注目しておりまして、オウム真理教をすぐに連想させる部分もありますが、例えばNo.24の句、もっと一般的なイメージとしての教祖ではないかなと思います。

No.24 「買はされてゐる水晶は教祖の為」

重要なのは、教祖と私という関係の中で世界を作り上げている点です。ただやはり、1句1句で強いインパクトがあるかと言われるとそうではなく、100句の連作として出来上がっているのだと思います。

ということで、私の推薦作品は、作品受付番号1番、38番になります。これらの作品は、ある精神性というものを実験的に組み込むことを恐れていない姿勢を評価しました。

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

私の推薦作品は、作品受付番号1番、38番、45番です。城戸さんも推薦された作品受付番号38番については、自転車や汽車、難破船など近代的というか資本主義的というか交通手段がテーマのひとつになっていて面白いですね。

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

実験的な作品も良いなとは思いましたが、自分自身が最初に選んだ予選通過作品の中から選びたいと思います。中村さんも評価されていた作品受付番号58番、そして詩的な飛躍で言葉の面白さがあった作品受付番号101番、最後に作品受付番号105番です。

選考委員：中村 和弘氏（俳人）

私の推薦作品は作品受付番号58番、13番です。

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

私の推薦作品は作品受付番号58番、45番、95番です。作品受付番号58番は私の評価では断トツのトップです。次の2位は作品受付番号38番なのですが、この作品は推せない理由があります。100句の中で10句のショート俳句詩が盛り込まれているのですが、私にはその意味がまだ理解できていないのです。自分自身が推薦作品を選ぶ際に、空白の10句を持ったまま推薦するわけにはいきません。よって、私の評価上、上位作品である作品受付番号45番（キャッチフレーズ：俳句交響詩）を推したいと思います。更に、作品受付番号95番（キャッチフレーズ：自縛の騎士）も良い俳句をつくっていたので推薦します。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

各選考委員のみなさま、ありがとうございました。整理しますと、受賞候補に挙がっているのは以下のとおりとなります。この中から芝不器男俳句新人賞の受賞者が決まるという事になります。

1番：城戸さん、齋藤さん

13番：中村さん

38番：城戸さん、齋藤さん

45 番：齋藤さん、西村さん

58 番：中村さん、対馬さん、西村さん

95 番：西村さん

101 番：対馬さん

105 番：対馬さん

中村さんの批評・感想を聞いたところ、恐らく中村さんとしては受賞者は作品受付番号 58 番を推すことで心が決まっているものと思いますが、その他の選考委員の中で、絶対にこの作品を推したい、もしくはこの作品は推したくない等の意見がありましたらお願いできますでしょうか。

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

私が作品受付番号 58 番ので注目しているのは、No.37、No.75、No.86、No.94、No.97 です。しかし、応募作品全体でみても最も良い作品 5 位以内にも入れていないですね。他に強烈な作品が多かったため、この作品は私には少しおとなしく感じました。

No.37 「疼痛のたとへば花の水面かな」

No.75 「星々のあひひかれあふ力の弧」

No.86 「秋淋し日月ともにひとつゆゑ」

No.94 「寒林を遠く治めて天淋し」

No.97 「枯蓮を手に誰か来る水世界」

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

なるほど、ありがとうございます。作品受付番号 58 番に関しては、城戸さんから「うますぎる」というコメントがありましたね。その他に点が集まっている推薦作品に作品受付番号 1 番がありますが、対馬さんや中村さんはこの作品に関してどう思われますか。

選考委員：中村 和弘氏（俳人）

私の評価では、最も優れた 10 編の中には作品受付番号 1 番は入っておりません。しかし、かなり惹かれるものがあるのは確かです。30 編以内には入っております。例えば、No.6、No.10 など、大変良い句だと思います。

No.6 「野良犬を野犬に変ふる早星」

No.10 「源五郎までは喰つたが田亀とは」

だけれども、少し問題があると思っております。例えば No.3 などは新聞の見出しのように感じます。昨今、外国から動植物が入ってきていて、それをそのままうたってしまうような感じがします。

No.3 「船着場見たことのなひ蟻がゐる」

それから No.18、そんなこと言ってもらいたくねえなと思います。（笑）

No.18 「行く年やあなたの上に平和あれ」

アイロニーはあるものの少し散文的であり報告的でもあり、総合点としてみるとこの様な句が目立ちましたので、今回推薦しておりません。

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

俳句で思想を詠むというのは私も共感できる部分があります。俳句は思想が詠めるものであり、社会性こそ現代俳句の出発点だという気持ちも持っていますが、この作品はやや空回りしているような印象を持ちました。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

中村さん、対馬さん、ありがとうございました。これに対して、城戸さんと齋藤さんから何かコメントはありますか。

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

作品受付番号 1 番については、言葉の選び方や使い方を見ていると、我々よりも上の世代を想起させます。No.3 の句も、祖国から敵国に攻め入った際には、船着き場には初めて見る蟻がいたのだろうなと思います。

No.3 「船着場見たことのなひ蟻がある」

また、No.9 は「熱帯」、No.13 には「椰子の実」という言葉が出てきます。こういう言葉を見ていると、過去の南方に進出した日本人の罪と罰というのが浮かび上がってくる気がするのです。

No.9 「熱帯や計画都市の四車線」

No.13 「帯を斬る刃一閃椰子実売り」

No.55 の「人毛で編む」というのはアウシュビッツのことですよね。ただ、なぜこのような世界観みたいなものが伝わらないかということですね。

No.55 「人毛のセーターならば傷浅し」

敵国の女性を強姦したという様な事もそうですが、実際の戦争では生々しい多くの事が起こっているわけです。普通、日本人は占領地で犯した色々なことを話さないと思うのです。アメリカでもベトナム戦での文書やら燃やして隠滅して、全く語らない。そういうものがこの作品からは出てくるんですよ。こういう俳句は他にないわけです。渡辺白泉も戦争について多くの俳句を詠んでいますが、抽象化したものばかりで具体的なものは出てきません。この作品にも生々しい事は出てこないけれども、1 句 1 句を深くよめばその裏にある生々しいものが立ち上がってくるのです。例えば、No.78 の句、現代では従軍慰安婦の問題もなかったかのようにになっているが、全くなかったという事はある得ないんですよ。

No.78 「登高や贅の乙女腿白く」

我々の父親や祖父の世代がかつて犯した罪と罰というものがここに問われていているよ

うに思うのです。

この作品は1句1句、独立した句が多いと思います。例えば、No.72の句、天の川をうたっているながら辺りはほとんど闇だと。恐らく、異国の戦地で見上げた天の川がそうであったのだらうと。

No.72 「天の川ほとんどいたるところ闇」

No.48の句は顔のない仏とありますがこれはまだ完全に破壊される前の顔をそがれた状態のバーミアンの石仏を彷彿させますね。美智子皇后様もテロリストがバーミアンの大仏を破壊したことについて、「知らずしてわれも撃ちしや春蘭（た）くるバーミアンの野にみ仏在（ま）さず」と詠んでおられます。

No.48 「望月や並ぶ仏に顔のなし」

私が最も推したいのは作品受付番号1番です。歴史を知ることがまさしく現在を知ることであるし、文学をする時には常に時代と向き合いたいと思っています。そういう意味でこの作品は心に強く刻まれました。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

私は西村さんから司会を頼まれた時に「この芝不器男俳句新人賞はどんなに議論が紛糾しても最後には神が降臨し一つの作品を決めてくれる」と聞いていたのですが、それについてはやや疑心暗鬼でして、最終決戦をせざるを得ないかなと思っています。（笑）

各選考委員からこの1編だけ推したい作品を選んで頂きたいと思いますが、いかがでしょうか。各選考委員のみなさん、よろしくお願いします。

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

私は作品受付番号58番です。

選考委員：中村 和弘氏（俳人）

私も初志貫徹で作品受付番号58番です。

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

58番と105番で悩みますが、作品受付番号105番をお願いします。

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

私は作品受付番号1番です。

選考委員：城戸朱理氏（詩人）

困りましたね。（笑）正直に言うと作品受付番号38番です。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

今回の選考会の序盤から皆さんがおっしゃっているように評価が難しく、推薦作品も散らばっております。現時点の推薦状況は以下のとおりです。

1 番：齋藤さん

38 番：城戸さん

58 番：中村さん、西村さん

105 番：対馬さん

最も点が集まっているのは作品受付番号 58 番ということになりますが、作品受付番号 58 番に芝不器男俳句新人賞を決定するという事でよろしいかどうか、決を採りたいと思いますがよろしいでしょうか。作品受付番号 58 番が新人賞として悪くない、否定しないという観点も含めまして、意思表示頂けますと幸いです。それでは、作品受付番号 58 番は新人賞ということに賛成の選考委員は挙手をお願い致します。

中村・西村・対馬が挙手。

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

実際に、作品受付番号 58 番は水の句が心に響いて多くの句を選ばせて頂いています。中村さん、西村さんがおっしゃったように点数の高い俳句が多かったという事に何の依存もありません。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

今回は非常に評価が難しく、議論が盛り上がりましたので、芝不器男俳句新人賞として初めて、採決という形で新人賞を決めざるを得ないかもしれません。最も点の集まった作品受付番号 58 番を新人賞に決めたいと思いますが、城戸さんと齋藤さんにおかれては何か意見等ありましたらお願いします。

選考委員：城戸 朱理氏（詩人）

作品受付番号 58 番は本当に巧みで何の異論もありません。ただ、一言言いたいのは、私は俳人ではありませんので的外れかもしれませんが、この作品は芝不器男俳句新人賞でなくとも評価される作品なのではないかなと思った次第です。

選考委員：中村 和弘氏（俳人）

俳句というのは巧さというか、成熟しているという事が大事だと思います。例えば、作品受付番号 1 番が面白いと思いつつ推薦しなかったのは、アイデアを持つことは大事けれどもそれを自然とか物事に託し熟成してくるというのは、俳句の場合とても時間がかかるんですね。この作者に期待をしているし、齋藤さんがおっしゃる事は非常によくわかるのです

が、やはり報告的だと感じますし、この作品から立ち上がってくる事はヴィクトール・E・フランクルの『夜と霧-ドイツ強制収容所の体験記録』という本で既に世に出ているんです。色んな本を読んでいればこの様な知識は取得することができます。

No.30 の句。これは新聞で写真に出ていたと思う。これをもっと自分に引き寄せてくるのが大事。

No.30 「電線を渡る一列冬の猿」

作品受付番号 58 番を推した最大の理由は、ある熟成感があることです。新人賞といえど、季語や形式など、俳句を自分の肉体化しているかどうかがとても大事だと思います。

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

作品受付番号 58 番は私の評価において、技術点、芸術点ともにトップです。城戸さんからの意見に対する反論になりますが、この作品は他の賞では入らないと思います。この作品は理性と感性の狭間にある無常観で詠われています。涙の出ない哀しみが表現されています。例えば、No.68 や No.82 は他の賞では取られません。中村先生だからこそ批評できていますけれども、多くの選者は「批評する必要のない俳句」しか選びませんから。（笑）これらの句は批評しないとわからない。

No.68 「夕焼の煮詰まりし目をつむる人」

No.82 「輪の如き一日が過ぎ烏瓜」

この作品の涙の出ない哀しみというリリズムは、自信をも持って推薦できます。ちなみに、キャッチフーズは「現代の芝不器男」です。芝不器男俳句新人賞は芝不器男を超えていないといけませんから、そういう意味では、このキャッチフレーズで本当に良いのか悩ましいところではあります。（笑）

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

作品受付番号 58 番の No.86 なんかは私もとても好きですね。この切々とした感性は本物の芝不器男を超えているのでは・・・と思います。

No.86 「秋淋し日月ともにひとつゆゑ」

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

最初に批評・感想を述べたように新しい試みに挑戦している作品を選ぶとすれば、やはり推すべきは作品受付番号 1 番もしくは 38 番だと思うのです。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

齋藤さん、ありがとうございます。新人賞を決定する際に反対意見があったという事もきちんと書き留めておきたいと思います。それから、芝不器男俳句新人賞のこれからの在り方というのも考えていかなければいけません。次回は、アバンギャルドなものをどう発掘し

ていくのか、そして評価の進め方についても、今回の選考会を踏まえた上でよく詰めていけないといけないなと感じました。

今回は応募作品 140 編の中から最終的に新人賞として 1 編を選ばないといけないという事で、芝不器男俳句新人賞は 58 番に決めさせて頂きたいと思います。それでは、会場の皆様からのご賛同も頂きたくと思いますが、よろしいでしょうか。

会場の参加者より拍手。

芝不器男俳句新人賞：58 番

5. 各選考委員の奨励賞紹介（特別賞含む）

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

それでは、引き続き各選考委員より奨励賞を挙げて頂ければと思います。城戸さんから順番にお願いします。

選考委員：城戸 朱理氏（詩人）

城戸朱理奨励賞は作品受付番号 38 番でお願いします。

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

齋藤慎爾奨励賞は作品受付番号 1 番でお願いします。

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

対馬康子奨励賞は作品受付番号 105 番でお願いします。

選考委員：中村 和弘氏（俳人）

中村和弘奨励賞は作品受付番号 13 番でお願いします。

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

西村我尼吾奨励賞は作品受付番号 45 番でお願いします。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

各選考委員の皆さん、ありがとうございます。各奨励賞の受賞作品は以下の通りとなりました。

城戸朱理奨励賞：38 番

齋藤慎爾奨励賞：1 番

対馬康子奨励賞：105 番

中村和弘奨励賞：13 番

西村我尼吾奨励賞：45 番

それでは、次に関さんより特別賞を選んで頂きたいと思います。よろしくお願いします。

特別賞選考委員 関 悦史氏（俳人）

これまでの選考を聞いていましたが、作品受付番号 21 番は通ってほしかったなと思います。荒れた作風ですけども、SF っぽい感じもあるし、メディアを介したような幻想的な領域まで批判性をもって踏み込みながら、それを自分の身のリアルにまで引き込んで新しいアナーキーな文体を作り出していて、私はフランスのミシェル・ウエルベックを連想しました。

予選落ちした作品の中で特別賞候補として選んだのは作品受付番号 71 番の作品です。予選落ちした作品を全てよんでみて、時間を置いて、心の中から浮上してきたというか最も印象に残ったのが 71 番でした。文体としてはややこしくてわかりにくい句なので予選落ちしたのはよくわかるのですが、一方で芝不器男俳句新人賞であれば拾うことができる作品だろうという事で選びました。例えば、No.16 の句、「あへしらふ」という古語が入っています。これは「応対する、もてなす、受け答えする」というような意味です。

No.16 「今しある人をば花のあへしらふ」

No.8 の句、「ほめく」というのは「あつくなる」という意味なのですが、黒猫が虎のようにあつくなって小櫓に這い上っていると。情景としては猫が木に登っているだけですが、言葉や文体や詩の力で整えている。一度、対象を解体して、古語や知識を引きずり込んで再構築しています。

No.8 「男猫（をねこ）虎（とら）ほめきに小櫓（こなら）這ひのぼる」

No.66 の句、松の林と稲光が現れたというだけですが、自分が生きていなかった時代の事まで密かに入ってきます。そういう仕掛けがあちこちにあるのです。

No.66 「いなびかり松の昔の林あり」

恐らく、作品受付番号 71 番に対して、なぜわざわざわかりにくくするのかという批判もあるでしょう。しかし、なぜわかりやすくしなければならぬのかという価値観もあるわけで、わざとわかりにくくすることで歯ごたえと味の濃さが出てきます。それが即座にはわからないけれども心の中に残って留まり続けて、訴え続けてきます。

ということで、作品受付番号 21 番、71 番が特別賞の候補となります。

選考委員：中村 和弘氏（俳人）

私も作品受付番号 21 番の作品には注目しています。今日的なテーマを自分に引き付けているところがある。そこは非常に賛同します。ただ、長かったり、文体が定まっていなかったりするように感じます。城戸さんもおっしゃっていたように No.77 の句はとても感動し

ました。

No.77 「トマト腐る 緑の斜塔に立ち止まり」

No.93 のアニミズム的で面白い視点だと思います。

No.93 「黒土に手を入れ蛇との交尾は咎」

No.16、面白いです。

No.16 「重層労働射精のように走る安い車」

この作者に次回も頑張ってもらいたいと思っています。

特別賞選考委員 関 悦史氏（俳人）

作品受付番号 21 番は歴史的な批判も入っています。例えば No.83。ナチスの美学って実は健康的なんです。障害者が収容所に送り込まれていたり、前衛芸術を頹廃芸術の名のもとに弾圧したりした。ナチスはとんでもない事をしでかした歴史的に悪い存在なのにその美学は健康的なものであるという事が、季語に寄せて詠まれています。

No.83 「向日葵の美知るときに来る Hitler」

また、片仮名言葉、記号等、雑多な要素の混在にも必然性がある文体で、色々な要素を圧縮し、おかしさ、悲しみなど情的にも揺さぶってきます。非常に心残りなのですが、二作授賞はできないということなので、全作品通読後、時間が経ってからもその印象と違和が残っていたという事で 71 番を特別賞とします。

特別賞：71 番

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

今回は、今回を参考にして特別賞を複数出すことも、事務局として検討課題にしたいと思います。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

選考会の前に選考委員のみなさんと打合せを設けて、この芝不器男俳句新人賞の性格というものも見直してみるといいのかなと感じました。ここで、各選考委員から本日の感想を頂いて締めたいと思います。

選考委員：城戸 朱理氏（詩人）

今回は各選考委員の予選通過推薦作品が挙がってきた段階で票が散っているのがはっきりしていました。本日までに何度も読んだ作品が、いざこの場で他の選考委員の方々の意見を聞きながら読み返すと、また違うように見えてくるんですね。これは、評価する側からすると非常に悩ましいこととして、今回は筑紫さんがコーディネーターをしてくれたのでスムーズに受賞作品を選考することができました。本来、意見が割れて議論が紛糾していても

おかしくないと思いますし、それほどに評価が難しかったと思います。今回に関しては、明らかに新しい息吹というものを感じさせてくれる応募作品が多かったですし、非常に充実していたと思います。

選考委員：齋藤 慎爾氏（俳人）

私が最後まで推薦していた作品受付番号1番についてですが、実は100句のうち9句しか選句していないのです。選句数は少ないのですが、作品から志のようなものをしっかりと感じることができたので推薦していたわけです。

また、私が予選通過推薦作品に選んだ作品受付番号22番についても少しお話しさせてください。この作品に関しては35句も選句しております。音楽に関する色んなものが出てくるんです。音楽に精通しているような人（例えば、忌野清志郎など）が書いたり詠ったりすれば、こういう音楽を連想するものが出てくるというのはわかります。細かく見ていくとNo.18、No.28、No.32など。

No.18 「燕の子育つ音符のごと顫（ふる）へ」

No.28 「あさがほが空の五線譜へと絡む」

No.32 「手に拾ふ音叉はあきかぜの鎖骨」

非常に面白い句がたくさんあります。No.90の句、「木枯らし」を「色」として使うというのは珍しく良いですね。

No.90 「サーカスの檻に木枯色の象」

選考委員：対馬 康子氏（俳人）

私は前回、定型外で詠んでいる一行詩のような作品を奨励賞に選びました。今回は俳句らしさの中で俳句の可能性を見せてくれた作品受付番号105番を奨励賞として選びました。この作者の体の中に流れている詩のクールさ、平明さに隠された難解性というものに惹かれて、最後まで推そうと思いました。この作品に関しては、新人賞から落ちてしまった場合でも必ず奨励賞にしようと心に決めていた作品です。

作品受付番号22番に関しては、私も予選通過推薦作品に選んでおりました。

選考委員：中村 和弘氏（俳人）

各受賞作品に関してはそうでもないのですが、応募作品全体の印象として、現代的な片仮名使いが多いと感じました。片仮名が良い悪いと言うつもりはないのですが、外来語が多くなっていることもあり、片仮名を安易に使ってしまっている句が目立ったように思いました。例えば、平仮名で良いところを片仮名表記にしたり、漢字を片仮名表記にしている句が気になりました。

一方、谷崎潤一郎の『瘋癲老人日記』という片仮名だけで書かれた小説があります。最初は読みにくいのですが、片仮名でなければ表現できない事もあるのだなと思わせてくれる

面白い本だったと記憶しています。100句全てを片仮名で詠むというのも、試みとしては面白いのではと思いました。

選考委員：西村 我尼吾氏（俳人）

応募作品 14,000 句の評価に関しては、頭を悩ませながら毎日毎日 300 句ずつ点数を付けていました。今回受賞した作品の私の点数を発表したいと思います。

＜西村我尼吾 評価点＞

芝不器男俳句新人賞：58 番 263.5 点

西村我尼吾奨励賞：45 番 250.5 点

齋藤慎爾さんは予選通過 5 編という厳選でした。自分としてもその作品を再度読み直して共感するものがありました。今回激論の影に隠れてしまいましたが、齋藤さんが選ばれた作品受付番号 5 番について、以下の 5 句に共感しました。

No.23 「永き日の海のにほひの石ひとつ」

No.50 「松風に振り返りたる捕虫網」

No.56 「夜濯のしばらく草の波うてる」

No.63 「海峡のひかりに開く落し文」

No.70 「天の川にはとり白きまま老いぬ」

俳句の骨法を踏まえた技量を感じました。この作者も芝不器男のようだなと思いました。No.50 は印象鮮明な名句だと思います。

惜しくも受賞を逃してしまった作品受付番号 21 番ですが、私は非常に好きな句があります。No.76 の句「万緑の夜にアジアの螺子生まれる」、これはアジアの生産現場の労働者など、アジアの人々（ミャンマー・ラオス・カンボジア・フィリピン等）の心を詠っていると感じました。私もインドネシアに 10 年住んでいまして、この句には共感できるものがあります。ぜひとも、この作者には次回以降も期待したいと思います。

特別賞選考委員 関 悦史氏（俳人）

作品受付番号 21 番に関してですが、No.1 の句など一見フィクションの様な、人口的な文章にみえる句が多いのですが、実はかなり身が入っている作品だと思います。海外に出るつもりもなく日本で安い賃労働をしていたら、知らず知らずのうちに国際的な経済体制の中に巻き込まれて貧しい生活をしている、という関係性をこの作品の中から読み取れますし、迫力もあります。惜しくも賞を逃してしまいましたが、私の中では今回の裏・芝不器男俳句新人賞は 21 番ですね。

審査が終わりましたので、ここで私が推したかった作品を発表しますと、作品受付番号 21 番、58 番、101 番、105 番、107 番です。

作品受付番号 107 番は、おおむね文体はできているので、もう少し評価されても良かったのかなと思います。人間の姿や体の一部が出てくるのですが、そこから何か妖しさのよう

なものが立ち上がってくる感覚があります。心情的にしっとりしたものがあるんですが、自分の中で完結していないところが良い作風を生んでいると思います。

作品受付番号 44 番の「教祖」の作品についてですが、この作者は悲しいくらい正気な人だなと感じました。99 句まで教祖を描いて、最後の 100 句で教祖を刺して自分も死んでますよね。自意識の中で妄想を膨らませて遊んでいたら、最後にこれでは駄目だよとなって自分も死んでしまうという、この正気っぷりが非常に哀さを感じさせます。自意識の在り方が自分で見えてしまっている。

作品受付番号 100 番の「です」でまとめられた作品ですが、どんなに淡い生活情景も全て「です」という表現の中にまとめ込んでしまうことで、ポップアート的なフラットな作品になっています。

コーディネーター：筑紫 磐井氏（俳人）

皆様、ありがとうございました。それでは、この最終選考会の結果、受賞された方々の氏名を読み上げたいと思います。

芝不器男俳句新人賞：生駒 大祐（58 番）

城戸朱理奨励賞：表 健太郎（38 番）

齋藤愼爾奨励賞：菅原 愼矢（1 番）

対馬康子奨励賞：堀下 翔（105 番）

中村和弘奨励賞：松本 てふ子（13 番）

西村我尼吾奨励賞：佐々木 貴子（45 番）

第5回芝不器男俳句新人賞特別賞：田中 惣一郎（71 番）※旧俳号：白川走を

これにて、第5回芝不器男俳句新人賞の最終選考会を終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

6. 閉会の挨拶 西村我尼吾氏

毎回、必死の思いでこの賞を続けてまいりました。実行委員長挨拶の中にもありましたように、芝不器男俳句新人賞はこれからがスタートでございます。月に 2 句、年に 25 句、4 年で 100 句と、新しみを追及して、句をつくり溜めて頂いて、次回の本賞で俳句の世界を変えていくような作品を打ち出して頂きたいと思っています。選考委員の先生方のお話しも素晴らしく、特に私は齋藤先生のお話しを聞いて涙が出ましたけれども、この芝不器男俳句新人賞は「若者がこの場であらゆることに挑戦する」という機会を与え、そしてそれをフォローアップする、そういう側面がございます。芝不器男俳句新人賞の実行委員会参与として、少なくとも予選通過作品については短評を執筆したいと思います。更に関連雑誌にも今回の議論が反映されるような働きかけを行っていきたいと思います。

また、惜しくも予選通過できなかった応募作品の中にも間違いなく良い句があります。必

ず次回の本賞にもご応募を頂き、挑戦し続けて頂きたいと思っております。今後の俳句界を担う若者たちに期待しています。

また、今回の第 5 回芝不器男俳句新人賞の結果を踏まえまして、次回に繋げてまいりたいと思います。この場にお集まりの皆様、選考委員の皆様、本日は誠にありがとうございました。